岡山大学大学院文化科学研究科　『文化共生学研究』第1号（2003.3）

文化相対主義の困難と「文化の共生」の可能性

北村　光二

文化人類学の立場から「文化の共生」という問題を考えようとするとき、どうしても避けて通れない話題として、「文化相対主義」という考え方に関わる近年の議論がある。それによれば、20世紀の人類学のバックボーンであると考えられてきた「文化相対主義」が、認識というレベルにおいても実践のレベルにおいても、きわめて重大な欠陥を孕むものであり、それを深刻に受け止めざるを得ない状況が出現しているというのである。

まず、文化相対主義とは何かについて簡単にまとめておこう。文化相対主義とは、「それぞれの文化には独自の価値があり、一つの文化の価値や認識の基準を別の文化に単純に当てはめることはできない」というものであり、19世紀的な文化の斉一的発展段階説とその根本にあるヨーロッパ精神の普遍性への信仰を内部から批判する考え方として登場した。そしてそれは、20世紀半ばのアジア・アフリカにおけるナショナリズムの高揚の中で、新興国民国家の文化的自立を保証することに大きく貢献した。

しかし、それがその背景となっていた歴史的・文化的状況から切り離されたとき、文化の差異の主張は、異文化間の理解の試みの放棄を正当化するものへと変質してしまうことになる。すなわち、文化相対主義は、独自の文化を保持する権利を盾にとって異文化を排斥しようとする人種差別勢力と容易に結合してしまう、というわけである。さらに、このような「相対主義」的主張は、その主張自体が相対的にしか真でないということを認めなければならない、という認識論的難点も抱え込んでいるのである。

文化相対主義の困難は以上の点に尽きるわけではない。それは、この文化相対主義を唱導し、擁護してきた人類学者自身に対しても、以下のような無理難題を押しつける。すなわち、「フィールドワークにもとづく異文化理解」というやり方は、人類学の学問的営為を独自なものとする方法的特徴だと考えられてきたが、それは依拠すべき根拠をもち得ないままになされる徒手空拳の作業にすぎないことを自覚せよと迫るのである。なぜならば、すべての文化が相対的であるとすれば、それぞれの文化の境界を越えて相互の理解を可能にする共通の基盤が不在だということになり、異文化間の理解は原理的に不可能であるという結論が不可避的に導き出されてしまうからである。

そうであるならば、そのようなやっかいな「主義」は捨ててしまうしかないとも思えるが、人

類学者には、簡単にはそうできない事情がある。まず、そうすることは、長い間の努力の積み重ねによって何とか克服しようとしてきた、西欧中心的な「普遍的な人間本性」という啓蒙時代の遺物を復活させてしまうことになるからである。もっと深刻な問題としては、そこで文化相対主義にしがみつくことをやめて、西欧近代の思考を相対化するという立場を明確にしてそれを誠実に実行しつつ、異文化理解を可能にする自文化（西欧近代）と異文化に共通の基盤を探し求めようという方針を立てたとしても、そのようなより包括的で超越的な第三の地平を想定してコミュニケーションにおける合意を形成しようとするやり方は西欧近代に特有のものであり、その地平のもとで得られた理解を異文化に押しつけることによって、またしても西欧中心主義に陥ってしまうことになるというのである。

以上の議論を、「文化の共生」という問題に当てはめてみると以下のようになる。「文化の共生」とは、文化の多様性を認め、それぞれの文化の独自性を尊重することを前提として、それらが平等・対等に共に生きる可能性を模索しようという考え方だとしておこう。この考え方は、一見したところ、ごく当然の主張のように見えるが、そのままでは、独自の文化を保持する権利を盾にとって異文化を排斥しようとする主張に対して、あまりにも無防備な状態にある。なぜならば、「共に生きる」ことが実質的な意味を持つためには、それぞれの文化の自立性が保持されることが大前提となるはずだが、そのような文化的自立の要求と、複数の文化の共存という状況に不可避的な文化変容を肯定的に受容することとが、単純に矛盾するものになってしまうからである。

文化相対主義のもう一つの「困難」に目を向けよう。「文化の共生」という構想にとっては、この問題の方がより重要である。文化的自立の要求を尊重しようとするあまり、それぞれの文化を隔離した状態においてしまうというのでは本末転倒である。したがって、とるべき道は、異文化をその独自性のままに理解しつつ、その理解に即して相互の対等な交流を模索するというものになる。しかし、自らとは異なるものを、たんに「異なるもの」としてではなく、自ら自身をも相対化しつつ理解しようとするのであれば、その両者を包含する超越的な第三の地平を想定せざるを得ないということになるが、そのようなものの見方は明らかに西欧近代に特有なものなのである。そして、そこで得られた理解に基づいて異文化との交流を実践しようとすることで、その西欧中心主義的な理解を異文化に押しつけることになってしまうということである。

このような「困難」は、たんなる理論的な問題なのではない。この問題を現実的にも深刻に受け止めるべきものにしている事情は、この西欧近代こそが、現実の世界システムにおける構造的勝者なのだという点にある。文化相対主義があらかじめ含意してしまっている「異文化理解の不可能性」に果敢に挑戦して、自文化（西欧近代）を相対化するという試みを誠実に行ったとしても、そのような超越的な第三の地平のもとで合意を形成して交流しようとすることによって、その試みは構造的敗者の抑圧に直結してしまうというわけである。このような事情のもとで、異文

化理解の困難さという問題は、それ自身の困難に加えて、さらに、「コミュニケーションの過程に発生する権力作用」という問題を抱え込んでいるのだと考えられなければならない。

この問題は、人類学が直面している「危機」とそのまま重なり合う。『文化を書く』（クリフォード、マーカス編、紀伊国屋書店、1996年）は、人類学的営為の中核にある、フィールドワークをすることとそれにもとづいて民族誌を書くことを、人類学者の主観的で政治的な創作活動とその作品にすぎないと断罪した。その主張の核心は、人類学者は民族誌を書くことによって、対象を一方的に表象するという権力を行使してしまうのだという点にある。すなわち、異文化理解の困難さという問題とともに、その理解を他者に承認させるというコミュニケーションの過程に発生する権力作用を告発しているのである。「文化の共生」という構想においても、異なる文化と実際にどのように交流して「共に生きる」ということを具体化するのかということこそが、もっとも精力的に取り組まなければならない課題になるはずであるが、それは明らかにコミュニケーションのレベルの問題である。構造的勝者が構想する「文化の共生」の試みは、不可避的に、この「コミュニケーションの過程に発生する権力作用」という課題への対応を要求されるのである。

人類学の「危機」とは、このような自らの学問の存立基盤そのものを危うくするような難問を前にして、人類学が立ち往生してしまったかのような状態にあることを指しているのだろう。ただし、実際には多くの人類学者は、この混迷の中でも少しも絶望していないのだと思える。「フィールドワークにもとづく異文化理解」という実践を行ってきた当事者として、それが原理的に不可能だとする論理があることを認めたうえで、実際には「何らかのかたちで」可能なのだと考えているからである。この「実際には可能であること」を出発点に据えた人類学的思考を手がかりに、「文化の共生」の可能性を検討してみよう。

その道筋は、異なった者どうしが相互に異なったままに交流・交感するというやり方に求められる。松田素二は、「抵抗」の人類学を構想するというコンテキスト（『抵抗する都市』岩波書店、1999年）でこの問題を取り上げ、そこからの脱出の糸口を、初期の日本人アフリカニストたちの「実感」による異文化理解の実践に求めた。それは、生存と行動の便宜を核にした日常的思考と生活実践という経路を通して出会うことによって、異なった者どうしが異なったままに交流することが可能になるのだという考え方である。文化の境界を越えて共有している生活実践の構えを手がかりに共同の実践を行うことによって、相互に歩み寄り交じり合うという事態が進展すると考えるのである。

そのときの異文化通交の実感は、「当人のそのときの便宜を優先する知り方」というごく素朴な認識論に根差したものだといえるはずであるが、そのようなものの知り方は、近代の認識論と呼ぶべきものと鋭く対立する。近代の知り方は、「当人の」という認識の個別性、当事者性を普遍性、客観性によっておとしめ、「そのときその場での」という認識の融通性を恒常性、一貫性

によっておとしめ、「便宜性」を必然性によっておとしめるのである。このような近代の認識論のもとで、もともと流動的な小集団の束にすぎなかったものが固定的で必然的な「民族」となり、それを単位として他と高い境界によって隔てられた「民族文化」が自己形成された。そのとき文化相対主義というイデオロギーが誕生するというわけである。

ここで、「コミュニケーションの過程に発生する権力作用」という問題に戻ろう。近年の人類学の「危機」を引き起こした批判や告発は、この問題に気づき、それを深刻に受け止めるというところから始まっている。『文化を書く』は、人類学者が民族誌を書くことによって、対象を一方的に表象するという権力を行使してしまうという点を告発し、「文化相対主義の困難」は、超越的な第三の地平のもとでの合意形成が、構造的敗者の抑圧に直結してしまうことに気づいている。ただし、ここで指摘されている困難や欠陥は、異文化を理解するというレベルそのものにではなく、その理解を他者に承認させるというコミュニケーションのレベルにあることを見逃してはならない。

一方で、松田の提案する「共通の生活実践の構えを媒介にした異文化通交の試み」も、確かにコミュニケーションというレベルの問題である。しかし、この二つのコミュニケーションは、同じコミュニケーションとはいいながら、明らかにまったく異なった性格のものなのである。第一のものはコミュニケーションを、発話や文字化されたテキストを媒介に、ある個人に帰属する認識を別の個人が自らの認識として取り込むという過程だと考えている。それに対して第二のものは、「生活を営むうえで誰もが必要としていること」という共通の要素を手がかりとして共同の実践を行うことだと考えられている。そして、そのコミュニケーションの過程に権力作用の発現が危惧されるのは、もっぱら第一の場合なのである。

ただし、第一の場合でも、当人の便宜に即して他者の認識を自らの認識とするという場合、たとえば「どこそこに水がある」という話を信用してそこに行ってみるという場合には、この権力作用の発現は問題にならない。第一の場合で、どのような認識を自らの認識として採用するのかという認識論的基準として、当人の「便宜」の代わりに、形式的整合性や客観的実証性といった当人の外部から与えられる超越的な「必然」に従属するというやり方をとることがあらかじめの前提となっているとき、それが問題となるのである。構造的勝者が、そのような近代に固有の認識論的基準を一方的に相手に押しつけたり、そうしながら「必然」を偽装した認識を相手に押しつけたりするとき、醜悪な権力作用が発現するというわけである。

しかし、ここで気づかなければならないことは、コミュニケーションの場をそのような「必然」に従属するものに限定してしまったのは、「近代のものの見方」そのものなのである。そうなってしまうのは、突き詰めていえば、人間が言語により強く依存するという方向性のもとで、認識やコミュニケーションという活動を以下のようなものに限定するという傾向を拡大させてきたこ

とに由来していると思える。すなわち、コミュニケーションを、発話や文字テキストを媒介に、ある個人に帰属する認識を別の個人が自らの認識として取り込むという過程に限定しつつ、認識をコミュニケーションの場で言語によって表現されて特定化されるものに限定してしまうのである。それによって、認識は行為から切り離され、その認識を手にすることで現実にどう働きかけるのかという問題が捨象され、認識はそれ自体として存在理由をもつものという位置に押し上げられた。そのとき認識は、何らかの外部的「必然」によって支えらなければならないものになったのである。

ここで取り戻されなければならないものは、認識と行為の結びつきであり、現実への働きかけによって望ましい結果を生みだすことに有効であるという基準で認識を構成するというものの知り方、すなわち、「そのときの当人の便宜を優先するものの知り方」である。そのような「ものの知り方」を尊重した共同の実践を積み重ね、相互の理解を深めることよって、異なった者どうしが相互に異なったままに交流・交感するという事態が可能になるはずである。そして、そのような地道な「文化の共生」の試みこそが、構造的勝者による異文化の同化でもなく、ましてや、異なるものを相互に隔離したままのたんなる共存でもない第三の方向性を切り開くことになるのかもしれない。